

### 『オンリー・クリアー・ファイナルコール』

香港で行われるオークションも、規則的には欧米の親会社のそれと同じ手法で運営されます。DYNASTY の場合は、経営者のクーグルもギブソンも、アメリカの有名オークションを渡り歩いて、今の地位を得ているのでそのルールでの運営は、何ら不思議なことではありません。参加者も皆それを承知しています。場での動きをちょっと書いておきましょう。我が社を含めて、日本のそれとは随分違うのです。

フロアでは、メールの 2 番札の上のスタート値のコールをギブソンが発声して、それを繋いでクーグルがオークショナーとして、持っている 1 番札のメールビッドを武器にして、場とテレフォンと競るのです。最初は気付かなかったのですが、結構な割合で、発句に 10,000 『オンリー』のコールがあったのです。物が物凄く良いのに、コレッポッチの安値でのスタート、だからフロアで頑張れよ、のギャグかと思ったのですが、さにあらず、メールの一番札がこの値段だよ、フロアであと一声で落ちるよ、という意味だと判りました。旧小判の 12 銭のカバーは、110,000 オンリーのコール、だから、場ではワンコールの 120,000 で落ちたのです。場で札が挙げた場合は、クーグルがその札を相手に、一気に数声早口で飛ばします。そして、『クリアー』のコール、メールの一番札を超えたという合図です。完全にはメールの札はオープンではないけれど、この雰囲気ならば、場に出たものはメールビッドに負けることはありません。勢いでやってしまいますから。メールをクリアーするまでの数秒は、このオークションに於いては、ほんのプロローグに過ぎません。

ここからが、本当の勝負が始まりです。手数料を得るには売れないといけないので、落札率は 100% を目指します。参考値を安くして、それでもメールビッドが無い場合は、半値以下でも売りにかかるのです。だから、場では数字が活発に動きます。今の相場の不人気品は極端に安いケースも出てきます。下見して、場でのビッドでないが無理ですが、

参加者が少なく、場が白けると思ったのですが、さにあらず、上から下までしっかり競ってしまいました。10,000 のメールをクリアーして、11,000 で札を上げ、瞬時に札を伏せるのです。クーグルは、目で 12,000 の相手を探します。場かテレフォンのどちらかに限られます。現れれば、ネクストコールの 13,000 でこちらの意思を聞いて来ます。伏せた札を挙げて、受けるの合図をして、直ぐにまた札を伏せるのです。延々と、そしてゆっくりと、ワンコールごとにその数字を貰うか、降りるかが続きます。コールされた数字は、指名されたビッド一人のみが貰う権利があるのです。勢いで複数の札が上がれば、ぶっ飛ばしのコールもあるのですが、普通は一声ごとに、マンツーマンでのイエス・ノーを探ります。

13,000 のコールを貰って、札を上げ、次の 14,000 の対抗者が現れなければ、13,000 でこちらに落ちます。14,000 で相手が挙げれば、こちらが買うには 15,000 が必要です。14,000 なら OK、15,000 は要らないという権利は有りません。14,000 の刻みは相手だけが貰える数字なのです。こちらが貰えるのは 13,000 か 15,000。14,000 は相手なので、頼まれている札が 14,000 の場合は、この数字なら止めるか、一声上の 15,000 で買うかの選択が必要です。14,000 で頼まれているから、何度も挙げて 15,000 でノーは、このオークションでは

お馬鹿の所業になってしまいます。日本でやっているような、ピッタリ同値、どちらか挙げては、海外では起こりえない異常な現象です。このシーンが起きた場合、オークショニアは、毅然としてルール通りに買う札を指名します。ビッダーには、コールの声が貰えるかどうかの選択の権利はなく 15,000 で自分が NG ならば、100%、14,000 で相手に行くのです。一刻みでの有利不利はビッダーには選択の権利はないのです。

このルールは合理的だし、私も意味は判っています。この前の『日中コンビネーション』大童・ハワイでの 900 万の時は、海外からのテレフォンビッド同士の競りなので、一声ごとの聞き取りをやりました。本当は毎回の弊社のフロアオークションを始める時には、今度こそ、全ロットで、このワンコールの相手指名のセールをやろうと思います。でも、このやり方は、スタートして 10 ロットは続きません。こちらは 1 時間で 500~600 のペースで札を読むのです。欧米のフロアのように、一声毎に相手を固定すれば、1 時間で 100 ロットしか進みません。場での競り具合という条件もあるのですが、このやり方は物凄く時間が掛かります。私の場合は、白けさせない為にスピードを重視するのです。

札を貰うのが一人になった段階で、『ファイナルコール』、その前に、『エニーモア』を聞く場合もありますが、このタイミングで初めて札を上げて良いのです。競りが過熱すれば、映画やテレビの美術のオークションの如く、クーグルが演説をやってくれます。中央部が 20,000 で手を挙げた。22,000 で自分の右が対抗する。左が 24,000 でビッドする。ファイナルコールの呼びかけの後で参入しても、突然に会場の一番後ろでニューカマー登場・・・とやってくれますよ。ハンマーを叩くまでは、寝ていて、飛び起きてビッドしても構いません。私はそれをやれませんが。今回の場合は、私は VIP 扱いで、席も指定で、札も目立つ数字で登録され、クーグルの視線がオープンの時点で全部こちらに来ていましたから、要るか要らないかの意思表示を明確にして、一声刻みでの、札の伏せ、挙げの呼吸を合わせる必要があって、遊びのビッドは無理でした。10 万ドルといった高額の場合は、長考しての、ゴーカストップかを迷っても十分に許されるし、逆に言えば、空の札での引っぱりもやられてないことも判ります。テレフォンを使つての如何様は無理なので、お付き合いはフロアの後ろの数人の、雰囲気を読んでのそれでした。それなりの目配せで、幾つかは降りるとやりましたが。

横浜の国際展での、某公益財団法人でのオークション、又聞きですが、ちょっとザワザワしたシーンがあったとのこと。札を途中から上げた人へ、最初から挙げないと駄目、札をコールに合わせて伏せた外人さんへ、札は挙げたままにしないでという注意だったとか。この運営のやりかたには、何らの説得力もなく、オークショニアこそが反省しないとイケません。ビッダーの方がオークションに慣れているということなのです。

このワンコールごとの意思確認は、競る相手がいないにも拘らず、オークショナーの空読みや引っぱりをやられることに對抗するためのビッダーの権利なので、欧米のオークションでは常識として認められているルールです。